

ペスタロッチーの幼児教育思想 — 『幼児教育の書簡』を中心として—

福田 博子

Thought of Early Education in J.H.Pestalozzi
— Focusing on "Letters on Early Education, addressed to
J.P. Greaves, ESQ." —

FUKUDA, Hiroko

キーワード：母性愛 親切 神 家庭の団欒 母親の教育

1 はじめに

本紀要創刊号(2005年)に「ペスタロッチーの『クリストフとエルゼ』における教育論」を執筆した。それは、ペスタロッチーの長編小説『リーンハルトとゲルトルート』の一部を百姓夫妻が毎晩読み、子どもや召使もこれを聞いて話し合うというものであった。ここには、家族の団欒の楽しさ、愛情に満ちた、安らぎを与える場こそ、家庭における居間であることが強調されていた。

昨今、幼児虐待、子どものいじめによる自殺、きょうだい殺し等悲惨極まる事件が相継いで起こっている。

本稿で扱うペスタロッチーの作品『幼児教育の書簡』(Letters on early Education, addressed to J.P. Greaves)には、母親、母性愛等の言葉が繰り返し登場する。『クリストフとエルゼ』を執筆したのは、ペスタロッチーが36歳の時であった。それから36年経って、この『書簡』を執筆したのである。したがって、幼児教育についての円熟した思想、母性愛の理解の深化が見られる。こういったことを中心に、この『書簡』における幼児教育思想を明らかにしたい。

2 『幼児教育の書簡』が書かれた背景

『幼児教育の書簡』は、ペスタロッチーがグリーヴズ(J.P. Greaves, 1777-1842)に宛てた書簡である。グリーヴズは、イギリス人で、父親から譲られた店を経営していた商人であったが、ナポレオンの大陸封鎖令¹⁾によって、その富を失い、生涯の方向を転換したのである。彼は、アイルランドのシング(J. Synge, 1788-1845)²⁾の書物を読み、ペスタロッチーを知った。そして、ペスタロッチーの教育思想に新鮮な興味を持ち、新しい進路を教育の世界に見出したのである。シングは、ペスタロッチーのイヴェルドン学園に滞在し、ペスタロッチーのメトードを学び、アイルランドに導入した人である。

では、イギリスでは当時どんな教育が行われていたであろうか。イギリスは産業革命を世界で最初に経験した国であり、時代的にいうと、1760年代から1830年代に当たる。1780年代には、貧しい労働者の子ども達を毎日曜日に教育するサンデー・スクールが開設されていた。産業革命によって、従来の手工業的な作業場に代わって、機械設備による大工場が設立され、社会構造が根本的に変化した。一番影響を受けたのは、熟練労働者であった。機械化により、熟練労働者は敬遠され、賃金が安くて従順な少年労働者が雇用されるようになった。その中には、5～6歳の子どもも多くいた。それで、このような少年労働者を保護するための法律が施行された。それは、「徒弟の健康と道徳に関する法

律」(The Health and Morals of Apprentices Act, 1802)である。しかし、この法律は多くの資本家達から嫌われ、空文化してしまっただが、政府当局に庶民の教育に関心を持たせるきっかけを与えた。

また、1816年に、オーエン (R. Owen, 1771-1858) は、スコットランドの自分の経営する工場内に性格形成学院 (The Institution for the Formation of Character) を創設した。この学院は、自分の工場で働く労働者の4歳以下の子どものための幼児学校と5歳から10歳までの子どもの初等学校であった。ちなみに、オーエンはイヴェルドンのペスタロッチーを訪問し、教えを受けたのである。

ところで、グリーヴズは1818-1822年の4年間、ペスタロッチーのもとで生活した。言語上の問題はあったが、両者は、肝胆相照らす仲となり、共通の目標を掲げていた。グリーヴズは、ペスタロッチーの教育論を何としてでもイギリスに普及させたいと思い、イギリスの母親達に読ませるために、彼に幼児教育思想をまとめさせることに成功したのである。

この『書簡』のドイツ語版は、発見されていないという。英訳者については、グリーヴズと面識のあった、後にハンブルク大学の歴史学教授となったヴルム (C. F. Wurm) であることが証明されている。ロンドンで最初に出版されたのは、1827年であり、その後ボストンで1830年に、1851年に再度ロンドンで、そしてさらに1898年にはニューヨークで出版というように版を重ねた。したがって、多くの人に読まれたということが推察できる。

元来、ペスタロッチーにとって貧民を教育によって救済することが悲願であったので、貧民学校を早急に建設する必要があった。1818年1月12日の『73歳誕生日講演』(Rede von Pestalozzi an sein Haus an seinem zwei und siebenzigsten Geburtstage, den 12. Jaenner 1818) で、貧民学校の設立を宣言し、9月13日克蘭ディーに開校することになった。ペスタロッチーが生涯取り組もうとしていた4つの課題は、民衆教育の研究、男女教員の養成、実験学校の設立、家庭教育の改善であった。克蘭ディーの学校の教育目的は、子ども達を将来貧しい子ども達の教員にすることであった。では克蘭ディーの学校はどんな学校であったであろうか。以下に、克蘭ディーの学校の様子を見たい。

克蘭ディーの学校は、孤児、貧児12名でもって始められたが、数ヶ月後には、子どもの数は30名に達したという。貧しい幼児が楽しんで学習に取り組んでいる様子が描かれている。

「5歳ないし6歳の子ども達は数、形、語の練習のために愉快地に数時間を過ごした。それよりもっと年の少ない子どもでさえもただそこにいるだけで何事かを学んだ。ある者は非常に熱心であったので奨励というよりも制止を必要とするほどであった。最もよくできる子どもは他の子どもを教えることになった。彼等は喜んでそれをした。冬も夏も、夜も昼もしばしば子ども達はイヴェルドンの隣村グランドソンに行き、自分達より年上の子どもを教えに行かされた。イヴェルドンでは、彼らの教え方は、ある教師等よりも優れていると見做された。彼らは何かを習うという期待の感情を子どもに起こさせることなく、教えることを知っていた。彼らは時には、自分で教えつつ、ある子どもそのものから自分の知識を引き出したようであったといわれている。」³⁾

1817年、グリーヴズはイヴェルドンに行った。彼は、この時、40歳であった。グリーヴズは、克蘭ディーの貧民学校で英語教師として働いた。しかし、設立の翌年1819年秋、克蘭ディーの貧民学校はイヴェルドン城内の学園に合併した。⁴⁾ それで、彼はイヴェルドンに移り、イギリスから来ている留学生の指導等に当たった。そして、1822年に帰国し、ペスタロッチーの教育精神や教授法の普及に努めたのである。その努力が実り、1837年ロンドン近郊にペスタロッチー主義のオルコット学園 (Alcott House) を設立した。

3 『幼児教育の書簡』における幼児教育思想

本書は、1818年10月1日1信から始まり、1819年5月12日34信で終わっている。最後の5月は2回であるが、毎月4回から6回にわたって書かれている。この書が執筆された時、ペスタロッチーは72

歳で深遠な教育思想の体得者であった。訳しにくい英文であるが、筆者が興味を持った箇所を取り上げ、できるだけ分かりやすい言葉で紹介したい。原書を忠実に引用した箇所には注を付けた。また、各書簡のタイトルは筆者が付けた。

■第1信 幼児の精神的発達における母親の助力

幼児の精神的発達において、母親たる者の助力が是非とも必要である。グリーヴズを通して、大英帝国の母親達に話しかけることを幸せに思うと述べている。

■第2信 母性愛は優しく、力強い

母親には自分の子どもの発達の差配者になる資格が備わっている。その資格は、造物主によって親になる前から授けられている。「母性愛 (maternal love) は自然の全秩序の中で、最も優しく、最も大胆な力 (most intrepid power) である。(中略) 私が母親に望みたいのは、自分の愛をできるだけ強く働かせながら、行動のさいに、思慮によってそれを調整して欲しいということである。」⁵⁾ 子どもを愛し得る限り愛すること、しかし決して溺愛や盲愛ではなく、思慮的な愛である。

■第3信 子どもの成長に対する母親の喜び

子どもには人間性のあらゆる能力が賦与されているが、まだ蓄であり、発達していないのである。個々の能力が発達する以前に、その能力を見分け指導するのは、母親である。それは、母親の観察によってである。子どもの手の最初の動きは、玩具を握ることであり、そこから一連の活動が始まる。次には、子どもの注意力が喚起され、目と耳は色や音に向けられる。やがて美しい花の色や心地よい音楽に感動させられるであろう。精神的活動の最初の兆候が現れているのである。母親は、子どもの知覚と推理能力との最初の兆候を喜ぶ。母親はこれらの兆候によってもたらされる喜びを最高のものと感ずるのである。

■第4信 母親への要請

我が子の成長において、細心の注意を必要とするものは何か、母親は何もしなくとも、自然の過程をたどるものは何か、子どもの将来の幸福に重大な関係を持つのは何かと、母親は考え悩むのである。ここで、大切なことは最後の問題である。子どもは内なる良心の声によって指導され、命令されている。こうして道徳的向上が遂げられる時期が来る。母親は子どもの多様な人生のあらゆる相を概観すべきである。子どもを愛していればいるだけ、子どもの人生についての考察が必要である。

■第5信 人間の諸能力の開発

人間の諸々の能力は、どれか一つの能力が優勢になるのではなく、すべての能力が開発されなくてはならない。即ち、人間の精神的な本性に基づいて、すべての能力が活発に活動できなくてはならない。

■第6信 信仰と愛の力は子どもに備わっている

他の諸能力が眠っていても、信仰と愛の力は、子どもに備わっているのである。しかし、それは子どもの中で、成熟し純化されるものではなく、人間性から養分を吸収して増強されなければならない。子どもの中の愛と信仰の力を日々育むなら、諸々の徳の芽が生ずるのである。それらを育むのは母親の役目である。

■第7信 子どもを親切に扱うこと

子どもを親切に扱おうと、それ以外の手段で扱うより子どもの成長を促進することになる。つまり親切が子どもの中の心に共感を呼び起こすのである。その応答とは神である。母親は自分の子どもへの愛が最も激烈且つ活発になった瞬間に、神と至近距離にいることを感ずるのである。幼児の心の中にある感謝、信頼、愛着の感情は、母性愛と同様に神によって植えつけられたものであることを母親は確信している。

■第9信 人間と動物との違い

人間は造物主によって、本性の下級な部分を統御し、より高級な素質に従うように、また、動物は本性中の本能に従うように運命づけられている。

■第10信 人間は動物的状态から、人間独自の道徳的状态に至る

生後しばらくの間、子どもは身体的にも、能力的にも無力で、貧弱である。しかし、まもなく母親の愛に満ちたまなざしに応える日が到来する。歓喜の笑みと悲哀の涙は、人間のみにも与えられた感情の最初の兆しである。

■第11信 個人的欲望をより高次な目的に

動物的本能は自己保存を最高目的とし、刹那的満足のみを追求する。しかし、人間の精神的本性を最も明確に示す事実は、他人の幸福のために自分の慰安や娯楽を犠牲にするという事実、個人の欲望をより高次な目的に従わせるという事実である。

■第12信 子どもの諸々の要求を見極めよ

「わが子の真の要求を無視しないで、そうでない要求やしつこくせがむ要求を意のままにかなえてやらないようにして欲しい。このようにすることが早ければ早いほど、また永続的であればあるほど、子どものために、より大きくより効果の長い利益がもたらされることになるであろう。」⁶⁾

心身を健全な状態に保つには、子どもの望みは少なく、たとえ望みがすべて叶えられなくても、満足させなくてはならない。これは、現在にも十分通用する親の教育的識見ではないであろうか。

■第13信 母親は子どもの情愛の対象である

ここで、母性愛について記述している。それをまとめると、以下の通りである。

「幼児期は、道徳的能力が全く欠如しているか、眠っている時期であると、大多数の哲学者が強調している。(中略) 幼児のより高度な本能は、動物的な本能の旺盛な勢力と戦うために鼓舞されなければならない。(中略) 激情は節操によって鎮められ、欲望は理性によって統制されるが、節操と理性の両者に訴えられない時期、即ち幼児期を、神はその代わりになる強力な力、母性愛で埋め合わせをしているのである。幼児期の子どもの情愛の対象として、母親以上の者はあり得ない。」⁷⁾

動物的な本能に対して、より高度な本能を鼓舞するのは、母性愛によってである。さらに、ペスタロッチーは、子どもに対する親の権威についてのある高名な学者の意見を紹介している。

「恐怖と畏敬が子ども達の精神に対する親の最初の力となるべきで、愛と親交はもっと大きくなってからの力とすべきである。」⁸⁾

そして、この意見を、学者の著書の他の頁にみなぎる進歩的な感情とは明らかに矛盾することを指摘している。この学者とは、ロック (J. Locke, 1632-1704) である。

では、ロックはどのように主張したかを確認したい。

ロックは『教育に関する考察』(Some Thoughts concerning Education, 1693) の第二章 精神についての「畏敬の念」で、以下のように述べている。

「怖れと畏敬とが子どもの精神に対する親の最初の力となるべきであるし、子どもが大きくなったら愛情と友情とがこの力をうけついで維持すべきである。」⁹⁾ また、「もしも子どもが親を畏敬することを望むのならば、子どもが小さい時にその強い印象をとどめるがよい。そしてだんだん成長するに従って親と親しく交わること近づくことを許すべきである。そうすれば、子どもが幼い間は、親は子どもをその忠実なる家来として(適度に)従え、成人した暁には、親の親交ある友人として迎えることになるのである。私が思うに、これに反して、子どもが幼い間は我が儘一杯に無遠慮に育てるが、大きくなるにつれて厳格にし一定の距離を隔てて近づけないという

人々は、子どもにふさわしい教育法というものをひどく取り違えているのである。」¹⁰⁾

ペスタロッチーは、恐怖心を人生の最初で、重要な時期、即ち幼児期に適用することは好ましくないこと、また、畏敬の心を道德教育の動機とすることは不適當であるというのである。

■第14信 母親の果たすべき本分

幼児の母親に対する情愛と信頼とが根づいたら、それを助長し、強化し、向上させるために全力を注がねばならない。しかし、教育は漸進的且つ累進的に改善を目指す仕事であるので、人間の道德性の向上にいつでも参加する覚悟でいなければならない。

■第15信 母親に対する子どもの情愛はいつか神への信仰に

幼児の母親に対する情愛は、一層母親としての自覚を促す。しかし、子どもと母親とを結びつけている絆がやがて切れる時が来る。即ち、それは神への信仰にまで高められるのである。

■第17信 母親は情愛を持ち、確固不動であれ

幼児の執拗なおねだりの制御に関して、母親は慎重でなければならない。母親は、子どもに対して注意深い世話をし、全力投球し、笑顔で世話をすること、そして、子どもの真の要求を例え一つでも見落とさないことが肝心である。また、母親は自分自身の弱さを常に警戒していなければならない。子どもの欲望を何でも叶えてしまっ、ますます子どもを貪欲にしまってはいけない。欲望を禁止するだけでは、大いに欲望を刺激することになる。罰を与えたりすることは、恐怖である。恐怖がもたらす結果は、甘やかしがもたらす結果と同様に有害である。大切なことは、情愛を持ち、確固不動であるということである。

この内容は、第12信とも関わっている。この主張と共通なロックの主張を掲げる。彼は「子どもの欲望」で次のように言っている。

「(前略)子どもはほんの赤ん坊の時から、その願望に打ち克ち、欲望が無視されることに慣れなければならない。即ち、子ども達が一番最初に知るべき事柄は、何事でも、それが子どもにふさわしいと考えられるのでなければ与えられないこと、単に子どもが満足するからというだけの理由では何事も許されないとことである。」¹¹⁾

ペスタロッチー自身、他の書物で次のように言っている。賢明な母親は、自分の子どもの面倒を一生懸命見るが、子どもの気まぐれや我が儘な欲求には取り合わない。

「聡明な思慮深い母親は、わが子のために献身的に生きるが、子どもの気まぐれや子どもの動物的に刺激され、鼓舞された我欲のために尽くしはしない。」¹²⁾

また、子どもの自然の欲求を満たさなかつたり、遅れて充足させることになると、子どもの母親に対する愛情や信頼の気持ちは芽生えず、将来の人間形成にマイナスになる。

「幼児の要求が遅れて満たされる場合には、もはや母に対してあるべき愛や信頼の神聖な萌芽は、合自然的に発展し、鼓舞されることができなくなる。この場合には、幼児のうちに要求を満たすことによって生ずる平安の代わりに、動物的な粗野な最初の萌芽、悪しき不安が現れてくる。」¹³⁾

■第18信 やがて子どもの情愛は母親以外の人に注がれる

子どもはいつまでも母親に依存しているわけではなく、母親から身体的に自立していく。その場合、子どもの情愛は母親以外の人に注がれる。

また、ここでペスタロッチーは母性本能についても述べているが、母性本能は他の対象に轉移できるというのである。即ち、事情があつて、他人の幼児に母親として対処することを求められた人達が、あだかも実の子どもに対するように情愛を注いでいるのを観察したのである。これは、ペスタロッチーの幼少時代からペスタロッチー家のために献身的に働いてきた下女のバーベリー、そしてノイホーフ時代、農場経営に失敗し、続いて貧民学校も閉鎖しなければならなくなり、困窮のどん底に陥っていた1780年頃、突然若い女性リザベートが奉仕を申し出、せん病質の

ペスタロッチーの長男を我が子のように面倒を見たこと、孤児院や学校でのペスタロッチーの経験によるものであろう。

■第19信 母親との新たな絆

子どもが一人で歩けるようになることは、子どもにとっては画期的なことである。子どもは自分で母親を探ることができるようになる。母親にとっても、子どもが母親を探す姿は、情愛の新しい表現と感じられ、それは母子の絆を一段と強めるのである。

■第20信 子どもは知的・道徳的にも自立するようになる

子どもは、母親から身体的に自立するばかりでなく、知的及び道徳的にも自立する。即ち、一定の年齢に達すると、幼児の周囲のあらゆる事物は、幼児の思考を促進する手段となり得る。また、子どもは母親が信頼している人を信頼することを学ぶ。子どもは真理と正義とに対する純粋な感覚を持っており、単に盲目的に従うわけではない。人間に対しても、自分で判断し、人柄を考慮するようになる。

■第22信 体育を通しての道徳教育

体育は、道徳教育にも関連している。体育は、子ども達を快活さと健康に導くし、共同精神や仲間意識を醸成し、観察する者の目を楽しませ、喜ばせるのである。さらに、勤勉の習慣、寛大で率直な性格、りりしい勇気、さらに苦痛に耐える雄々しさを身につけさせることができる。したがって、早くから、運動を継続的に行なわせることが望ましい。

■第23信 音楽を通しての道徳教育

ルター (M. Luther, 1483-1546) は、不自然な華やかさと無意味な装飾のない、荘重で、純真な印象を与える音楽を、真の信仰心を育成させるための最も有効な手段と見做していたのである。音楽の美が保持されている学校や家庭では道徳感情ひいては幸福感に満ちた場面が常に展開されている。

また、ペスタロッチーは、この当時グリーヴズの国で、音楽が一般的教育の中でさほど重視されていないことを嘆き、音楽の影響力を民衆教育にまで及ぼすためには、音楽教育の導入のために時間を割くべきことを提案している。スイス、ドイツ、プロシアでは、どの村の学校でも、適切な計画に基づいて、音楽の初歩を身につけさせようとする努力が払われているとさえ言っている。

■第25信 一家の団欒は学校よりも重要である

道徳的宗教的感情で高揚された思いやりの気持ちが、家庭にみなぎっていること、母性愛が幼児教育の最も重要な手段とされていること、母親が優れた感情の呼びかけに喜んで従うこと、これらのことは家庭教育に肝心なことである。教育の真の改善は、知識の普及のみではなく、一家の団欒を大切にする母親の教育を最高目的にしなくてはならない。

■第26信 どんな母親でもできることは沢山ある

教育の真の改善は、母親を教育することから始めなければならない。学校でできないことを家庭で行なうこと、個々の子ども達に注意を補うこと、権威では絶対に強制できないことを、情愛によって説得することを母親は知らなくてはならない。貧しくて、無知で、経験の乏しい母親でも、子どものためにしてやれることは沢山ある。例えば、言語教育である。1歳半から2歳にかけて、幼児は物の名前をためらわず尋ねる。母親は子どもに物の名前を教える。子どもが物の名前を覚えてしまい、物の区別ができるようになると、事物の形・大きさ・色彩・外面の硬軟、触れたさいの音響等についても理解できるようになる。こうして、事物の原因を調べたり、結果を考える習慣を身につけるのである。子どもの道徳性の発達に全力を傾注する母親の願望に優るものはない。「母性愛は造物主の惜しみない贈り物」¹⁴⁾ であるとペスタロッチーは言う。また、母親は子どもについて愚痴を言うてはいけないという提言もしている。

■第27信 女性の育成

立派な学校とは、女性の特性が幼児教育に顕著な役割を演じられるように、早くから整備された学校である。このような学校を設立するためには、女性の特性が理解され、評価されなければならない。道徳的尊厳を備えた人格、柔和な物腰、確固不動の信条、思慮分別と感情とが調和を保った女性の育成が肝心である。

■第30信 勉学への興味の喚起と優れた教授法

勉学に対する興味の喚起と強化は、教師さしあたっては母親の努めである。また、優れた教授法は、質問によって生気を与えられ、事例で活気づけられ、優しさで興味を喚起され、惹きつけられる教授法である。

■第31信 教授法・・・形・数・語をもとに、また事物によって授業が展開される

数と形と語は物質界の尺度であり、これらに物質界の特徴が包摂されている。例えば、子どもに「二」という概念を教える場合、二個のボール、二本の薔薇、二冊の本というように、具体的に教えると理解しやすい。初歩的なことが明瞭、明確に教えられた後は、すべては質疑によって行なわれるべきである。また、ペスタロッチーの学園を訪問した多くの外国人は、子ども達が算数の問題を難なく迅速に解いたことに驚嘆した。このことは、言葉によってよりは事物によって教えるべきであることを、ペスタロッチーに確信させたのである。さらに、子どもはできるだけ早く、自分の国語をマスターするように指導されるべきである。

■第32信 教育は人間を有用な社会の一員にし、また個人の幸福に寄与する

人間を社会的観点で捉えると、人間は教育によって有用な一員にさせられるべきである。真に有用であるためには、真に自主的であることが不可欠である。行動に自主的精神がみなぎっている人は、社会の尊ぶべき、有用な一員となる。他方、人間を個人的観点で捉えると、教育は個人の幸福に寄与すべきである。幸福な人とは個人的、利己的欲望を満足と平静さを犠牲にすることなく、断念できる人である。

■第33信 母親に対する幼児の愛と信頼は、創造者に対する感情の前兆である

母性愛は教育における第一の原動力である。しかし、母性愛は人間の感情の中で、最も純粹であるけれども、人間的なものである。救済手段は神の力の中にある。母親に対する幼児の愛と信頼は、人間の創造者イエスに対する愛と信仰の感情の前兆に他ならない。

■第34信 キリスト教の究極目標は、人類の教育の完成にある

「母親としての情愛を示す方法は、我が子への神の贈物を保護すること、神に感謝し、神からの贈物の増大を期待すること、我が子の諸力の萌芽が開花することに全力を注ぐこと、自分の果たすべき義務に対して寛大で意志堅固で辛抱強いこと、情愛の動機を自分の心の中に求めて天恵を仰ぐことである。」¹⁵⁾

グリーヴズはペスタロッチーのもとに4年間滞在し、教えを受けたのであるが、両者の間に通訳がいたのか、ペスタロッチーがどの位英語を理解したのか定かではない。しかし、『書簡』では意志の疎通が十分行われた様子が窺われる。

ペスタロッチー研究者鈴木由美子は、『幼児教育の書簡』についていとも適切に言い表している。

「『幼児教育の書簡』においては、幼児を、誕生直後から自立への力を有した存在として捉えている。とりわけ、幼児に内在する愛と信仰の力の発達が中心的に取り扱われ、幼児の発達はより連続的なものとして捉えられている。つまり、『ゲルトルート教育法』においては母性愛のもつ自然的教育力が重視され、教育方法の観点から幼児を捉えたために、幼児の自己活動性に対する認識が不十分だったが、母性観の深化とともにペスタロッチーの幼児理解もいっそう深まっているということが予想されるのである。」¹⁶⁾

また、村井実は、「幼児の本性と母親の天性へのこの上なく美しい賛歌ともなっている。」¹⁷⁾と指摘している。

村井が指摘するように、この『書簡』は幼児の本性と母性への賛歌であるが、ここには深い信仰心が窺われる。したがって、キリスト教の知識なしにはペスタロッチーの思想を十分理解することはできないであろう。

イギリスでは当時、人間主義の教育が行われていなかったので、グリーヴズは、ペスタロッチーを通して、母性愛の尊さや濃やかさ、幼児の自立性や発達の連続性等をイギリス国民に知らしめ、感動させたに違いない。

4 結 び

以上、『幼児教育の書簡』における幼児教育思想を見てきたが、ペスタロッチーの子どもに対する観察力の細やかさと、母親への鋭いが温かみのある教育的助言に驚かされる。『育児日記』(Tagebuch Pestalozzis ueber die Erziehung seines Sohnes)において、ペスタロッチーは3歳5ヶ月になった子ども、ヤーコブを実につぶさに観察し、子どもの心の奥底まで見抜いている。この日記は1774年に書かれたもので、ペスタロッチーは28歳の若さであった。この日記も含めて、ペスタロッチーが51歳の時誕生した孫の観察や孤児院・学校での体験等が『書簡』の母体になっていると推測される。

イヴェルドンの学園を見学するために、沢山の外国人が訪れたのであるが、彼等はペスタロッチーの教授法の素晴らしさばかりでなく、教師と生徒との間に友情と信頼がみなぎっており、学校というより家庭の様相を呈していたのをどんなに驚嘆したであろうか。

上記にあるように「母性愛は、自然の全秩序の中で、最も優しく、最も勇敢な力である」「母性愛は造物主の惜しめない贈り物である」「母性愛は教育における第一の原動力である」「幼児期の子どもの情愛の対象として母親以上の者はあり得ない」という提言、家庭の団欒の大切さ、子どもの成長発達に対する限りない信頼は、19世紀に書かれたものではあるが、筆者の心を捉えるのである。また、幼児教育に関することばかりでなく、広く人生訓としても考えさせられる。

【注】

- 1) 大陸封鎖令とは、1806～1807年に、ナポレオン1世が大陸諸国にイギリスとの貿易や通信を禁じた勅令。大陸諸国も打撃を受けてフランスから離反し、ナポレオン失脚の一因となった。金田一春彦 石毛直道 村井純監修『新世紀ビジュアル大辞典』学習研究社 2004年 1511-1512ページ
- 2) シングは、二年間スペインに滞在し、イタリーを通過してスイスを旅行し、ペスタロッチーを訪問した。彼は、ペスタロッチーを敬愛し、ここに定住し、弟をこのイヴェルドンの学園で勉強させた。そして、ペスタロッチーの教育方法を故国に広めたのである。ペスタロッチーや周囲の人は彼を次のように批評している。「彼は豊富な知識の持ち主ではないが、恰も母の居間から初めて来たような心情の純粹さと恰もウエリントンの出征に参加したかのような意志の力とを持っている。」(ニーデラーの手紙より) H.モルフ著 長田 新訳『ペスタロッチー伝』第5巻 岩波書店 1941年 127-128ページ
ペスタロッチーも、彼を高く評価していた。「シングは、ペスタロッチーの誕生日のために貧民陶冶に関する著書千部に署名してくれた。それは私が一人の友人によって事業のために経験してきたことのうちで最も賢明なことである。そのような息子を持ったお母さんは、立派な方に違いありません。」同書 141ページ
また、妻アンナに宛てた手紙にも「もしシングやボビヒハイムがいなかったら、私は鳴き声を聞くどんな鳥でも逃げ去る梟のような孤独な生活を今していることでしょう。」と書いている。同書 144-145ページ
- 3) 玖村敏雄『ペスタロッチーの生涯』玉川大学 1980年 243ページ
イギリスで1790年代の終りには、ベルとランカスター等の考案による助教法 (monitor system)、即ち、助教を用いて大勢の子どもを一斉に教える教授法が開発されていた。ペスタロッチーの学校でも、ブルグドルフ以来 (1799年) 助教による教授法が工夫されていたが、その趣旨も役割も、ベル・ランカスターの場合と違って、全く人間主義的であったといつてよい。村井 実『ペスタロッチーとその時代』玉川大学 1986年 395ページ

- 4) クランディーの貧民学校が閉鎖の止むなきに至ったのは、次の三つの理由があった。ペスタロッチーの部下のシュミット(J. Schmid)が経営上の支配力を持っていたのであるが、一つは、シュミットに、貧しい子ども達の教育という理念が十分理解できなかったことが揚げられる。二つには、経済的理由で、貧しい子ども達を教育するには費用がかかったことである。三つには、クランディーの学校の教師はイヴェルドンの学園と同じ教師であったために、クランディーだけ特別に教育を工夫することは、困難であったのである。
同書 390ページ
- また、英国教会の牧師であったメイヨー (C. Mayo, 1792-1846) も、1819年から1822年までイヴェルドンに滞在し、イギリス人の子弟の世話をしたり、古典語、英語を教え、帰国後イギリスにおけるペスタロッチー主義の幼児学校や教員養成学校を推進する中心的役割を演じた。同書 395ページ
- 5) J. H. Pestalozzi: Letters on early Education addressed to J. P. Greaves, Esq. by Pestalozzi, Pestalozzi Saemtliche Werke. hrsg. v. A. Buchenau, E. Spranger, H. Stettbacher. Kritische Ausgabe, Orell Fuessli, 1975 (以下 P. S. W. と省略), Bd. 26, S. 49
- 6) Ebenda, S. 76
- 7) Ebenda, S. 78f.
- 8) Ebenda, S. 79
- 9) ジョン・ロック著 押村襄訳『教育に関する考察』玉川大学 1967年 64ページ
- 10) 同書 62ページ
- 11) 同書 59ページ
- 12) J. H. Pestalozzi: Pestalozzi's Schwanengesang, P. S. W. Bd. 28, S. 65
- 13) Ebenda, S. 64
- 14) J. H. Pestalozzi: Letters on early Education, S. 116
- 15) Ebenda, S. 141f.
- 16) 鈴木由美子『ペスタロッチー教育学の研究』玉川大学 1992年 45ページ
- 17) 村井 実『ペスタロッチーとその時代』玉川大学 1986年 396ページ

【参考文献】

- 1 ペスタロッチー著 皇 至道訳「幼児教育の書簡」『ペスタロッチー全集』13巻 平凡社 1960年
- 2 ペスタロッチー著 田口仁久訳『幼児教育の書簡』玉川大学 1983年
- 3 K. Silber: Pestalozzi, Heidelberg 1957
- 4 K. ジルバー著 前原 寿訳『ペスタロッチー』岩波書店 1981年
- 5 M. Liedtke: Pestalozzi, Rowohlt 1968
- 6 教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房 2004年

(受理日：2007年1月30日)